

## 2 研究の実際

### (1) 図画工作科における造形的な見方・考え方

#### ① これからの図画工作科の方向性

現行の学習指導要領では、創造の楽しさを感じることや、造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術文化に関心をもって主体的に関わる態度を育てることの充実が図られてきました。

しかし、感性や想像力等を豊かに働かせて思考・判断し、表現したり鑑賞したりする資質・能力を関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められています。

平成28年12月中央教育審議会答申において、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」について、小学校図画工作科では、以下のように整理されています<sup>(1)</sup>。

- ① 対象や事象をとらえる造形的な視点について理解するとともに、表したいことに合わせて材料や用具を使い、表し方を工夫する創造的な技能を身に付けるようにする。
- ② 造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方などについて考え、創造的に発想や構想し、自分の見方や感じ方を深め、味わう力を育てる。
- ③ つくりだす喜びを味わうとともに、感性をはぐくみ、楽しく豊かな生活を創造する態度と豊かな情操を養う。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日 別添9-2より引用

これらの資質・能力を育成するための中核となるものが、造形的な見方・考え方であり、その特徴は、知性と感性の両方を働かせて対象を捉えることだと示されています。知性だけでは捉えられないことを、身体を通して捉えていくことが、他教科以上に図画工作科が担っている学びだとされています。

児童の造形的な見方・考え方を育成し、それを主体的に働かせながら表現したり鑑賞したりする活動が、これからの図画工作科の授業づくりに必要だと考えます。

#### ② 図画工作科における造形的な見方・考え方

造形的な見方・考え方については、平成28年8月の教育課程部会審議の取りまとめにおいて、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」<sup>(2)</sup>と整理され、現行の学習指導要領における〔共通事項〕と深く関わっていると示されています。

〔共通事項〕とは、表現及び鑑賞の活動の中で、共通に働いている資質や能力であり、現行の小

学校学習指導要領には以下のように記されています。

「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。	
ア	自分の感覚や活動し、 { (低) 形や色など (中) 形や色、組み合わせなどの感じ (高) 形や色、動きなどの造形的な特徴 } をとらえること。
イ	{ (低) 形や色など (中) 形や色などの感じ (高) 形や色などの造形的な特徴 } を基に、自分のイメージをもつこと。

形や色、イメージなどは、児童が造形活動を行う上で、発想・構想の能力、創造的な技能を働かせるための具体的な手掛かりとなります。また、教師側からは、児童の活動を具体的に捉えるための視点になります。

したがって、児童が自分の感覚や活動を通して形や色などを捉え、それを基にイメージをもっているかという〔共通事項〕の視点を常にもち、指導に生かしていくことが必要だと考えます。

### ③ 造形的な視点で捉える見方・考え方

児童は、感受、表出を繰り返しながら造形活動を行っていますが、その過程で、対象への見方・考え方を変化させたり、新しく獲得したりしています。

造形的な見方・考え方について、佐々木達行は、マクロとミクロの2つの視点から捉えることができるとしています。マクロ的視点を造形表現活動のすべての表現・鑑賞内容に関わった見方・考え方とし、ミクロ的視点を造形要素に関わった見方・考え方としています。

そこで本研究では、佐々木の示す2つの視点を参考に、児童は、色、形、材質などの造形要素を基にミクロ的視点で分析的に見ながら、またそれらを組み合わせてマクロ的視点で総合的に判断して、表現活動を行っていると考えます。ミクロ的視点での見方・考え方を「分析的な見方・考え方」とし、マクロ的視点の見方を「総合的な見方・考え方」として、これら2つを造形的な視点で捉える見方・考え方として、本研究を進めていきます。

## (2) 「思い」を大切にした学習過程

### ① 事前調査から見える児童の実態

造形活動では、自分の「思い」を表すことをテーマや主題とする場合が多くあります。

「思い」とは、自分の夢や願い、経験や見たこと、伝えたいこと、動くものや飾るものなどの児童が表したいと思う心情のことです。

しかし、自分の「思い」をどのようにイメージ化し、表現につなげていくのか戸惑う児童も少なくありません。4年生30人を対象に、実態調査を行ったところ（平成28年6月実施）、図画工作科の学習で困ることとして、「何を描いたり、つくったりしたらいいのか決まらない」「描きたい（つくり

たい) と思うイメージ通りにいかない」といった発想・構想の段階に関わる回答が多く、全回答数の約70%を占めていました(図1・2)。

発想段階では表したい「思い」やイメージが曖昧であること、構想段階では自分の「思い」やイメージを具現化できにくいという実態があるのではないかと考えます。

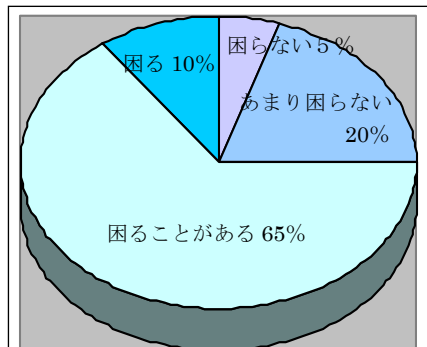


図1 質問「図画工作の授業で困ることがあるか」に対する回答

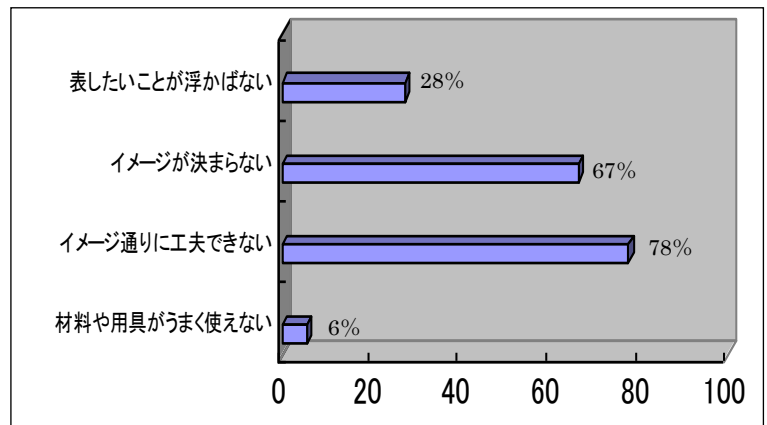


図2 質問「描いたりつくったりするときに困ることはどんなことか」に対する回答

## ② イメージを具現化して、「思い」を表現へつなげる

表したい「思い」を表現につなげていくには、「思い」を膨らませ、より良い「思い」を選択し、イメージとして具現化していくことが必要だと考えます。

現行の学習指導要領解説には、イメージとは、「児童が心の中につくりだす像や全体的な感じ、または、心に思い浮かべる情景や姿などのこと」<sup>(3)</sup>だと記されています。

本研究では、図3のように、児童が題材に出会い、表現する段階までに、イメージの「発生」→「具現」→「追求」→「深化」が行われていると考えます。

このようなイメージの形成過程では、常に発想・構想の能力が働いています。

発想とは、題材から自由に「思い」を膨らませる拡散的思考のことです。児童が、題材と出会い、これまで培われてきた感性や様々な造形経験で得た知識、また五感を通した新しい情報を基に、自由に「思い」を膨らませている段階と捉えます。

構想とは、自分の「思い」と発想した形や色、イメージをつなげる収束的思考のことです。児童が思考の中で膨らませたイメ

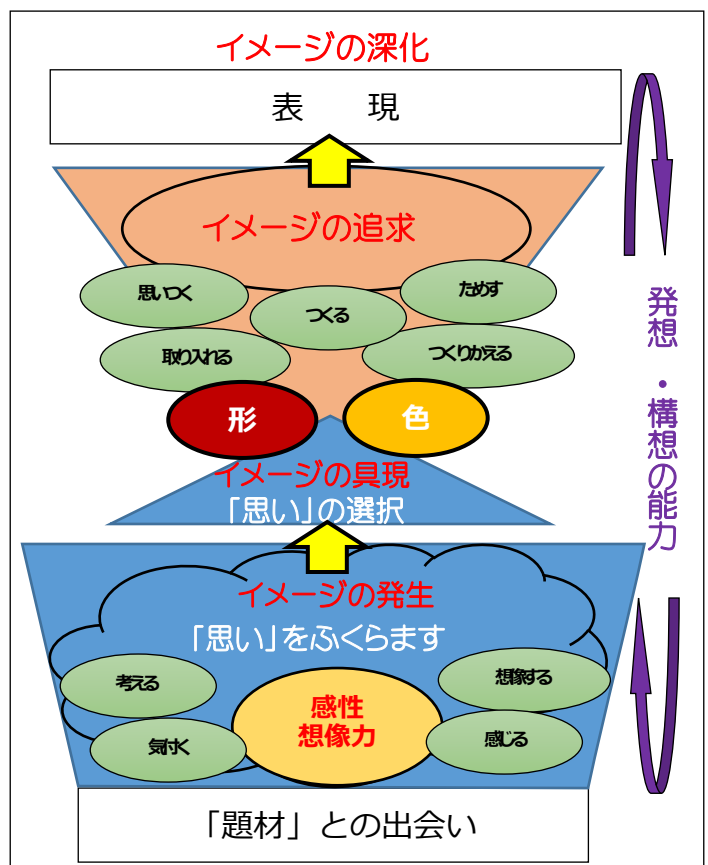


図3 イメージの形成過程

ージを、色や形に具現化し、自分の「思い」に合う表し方に近付ける段階と捉えます。

本研究では、イメージは生まれ、広がり、深まるものと捉え、児童は、題材との出会いの段階から表現段階まで、常に発想・構想の能力を働かせながらイメージを形成していると考えます。

### ③ 図画工作科における言語活動

中央教育審議会答申（H28）において、思考力・判断力・表現力等を高める言語活動や、言語以外の方法（音、形、色など）を用いた言語活動、音や形、色などにより表現されたことを捉えて言語化する言語活動の充実を図ることが求められています。そして、「捉えたことを喩えたり、見立てたり、置き換えたりすることは、表現や鑑賞を深めていく際の重要な活動」<sup>(4)</sup>と記されています。

図画工作科における言語活動について、柴田信孝と井上香織は、「形や色彩、材料等の造形的な言語を豊かに捉えて表現したり鑑賞したりする活動を中心に据えながら、互いの作品や美術作品などを鑑賞し、文字や言葉で書いたり話し合ったりする活動を、言語活動として適切に実施していくこと」<sup>(5)</sup>が必要だとしています。その充実のために、造形的な要素を言葉で考えさせ、整理させることが重要であり、図画工作科の言語活動を学習形態や活動内容等の視点で整理しています。

作品や体験から感じ取ったこと、形や色から生成されるイメージを、言葉や絵、身体を使って表現する活動を積み重ねていくことで、イメージや語彙が豊富になり、同時に感じ取る力やそれを基に思考、表現する力も育成できると考えます。

## (3) 本研究で取り入れる具体的な手立て

### ① 造形的な視点で捉える見方・考え方を広げる観点の設定

本研究で実践研究を行う、中学年の児童は、対象や出来事に対して自分の気持ちや考えを具体的にもつようになり、例えば、形や色などについては、三角形は鋭い感じ、赤色は元気な感じなど対象の感じまで捉えることができるようになります。児童が自らの感覚や活動を通して、形や色、組み合わせなどの様々な感じを捉えられるように、本研究では、佐々木の造形的な見方・考え方を参考に、造形的な視点で捉える見方・考え方を広げる観点を、次のように設定します（資料1）。

分析的な見方・考え方 (ミクロ的視点)	見方を 広げる	色	色彩（色相・明度・彩度）・類似色・補色など
		形	点・直線・曲線・空間・太細・大小・地と図など
総合的な見方・考え方 (マクロ的視点)	感じ方を 広げる	見立て・喩え（～のよう・○○みたい など） 印象（…の感じ …の様子 など）	

資料1 造形的な視点で捉える見方・考え方を広げる観点

## ② 造形的な特徴を可視化する言語ツール

児童が「思い」を基に表現を追求していくためには、心の中に生じた驚きや感動、願いなどの「思い」を形や色に置き換え、言葉のように使って思考しながら、曖昧なイメージを具現化する思考ツールが必要だと考えます。

そこで、「模様・色チャート」を作成しました（資料2・3）。「模様・色チャート」とは、KJ法による言葉集めや児童の発言から出てきた言葉を分類、整理したものです。この「模様・色チャート」の言葉や感じ方を、話し合いやワークシートなどに取り入れることで、児童が表したいイメージを整理する際に、どう表そうか、どう表したらよいかを明確にできると考えます。

また、伝えたい「思い」を話したり、互いの作品を鑑賞したりする際にも、イメージを共有しやすくなり、表現の交流も広がると考えます。さらに児童が、「どのように形や色などを捉え、それを基にイメージをもって表現しているか」という〔共通事項〕の視点での活動の見取りにも活用できると考えます。



資料2 色チャート



資料3 模様チャート

## ③ 「思い」を大切にした学習過程と言語活動

児童が主体的に造形活動を行うために、児童の「思い」の進み方とイメージの形成過程に沿った学習過程を設定しました。また、発想・構想する場面や表現する場面に、「共通事項」を支えとした造形的な視点で捉える見方・考え方を促す言語活動を次のように位置付けました（図4）。言語活動については、柴田と井上による「図画工作科における言語活動」を参考に設定しました。

学習過程	発想段階	構想段階	表す段階	鑑賞する段階
「思い」の進み方	「思い」を膨らませる	「思い」を明確にする	「思い」を実現する	「思い」を味わう
イメージ形成	イメージの発生	イメージの具現	イメージの追求	イメージの深化
見方・考え方				
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>○対象と関わり、味わう</li> <li>○感じたことや経験したことから、イメージや「思い」をもつ</li> <li>○造形的な特徴に気付く</li> <li>○見方や感じ方を共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分が表したいイメージや構想を記録する</li> <li>○感じ取ったことや考えを伝え合い、整理する</li> <li>○表現方法について意見を交換する</li> <li>○新たな見方や感じ方に触れる</li> <li>○表現の構想を見直す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○効果的な表現になっているか確かめる</li> <li>○イメージにあった材料や用具を試す</li> <li>○良さを取り入れる</li> <li>○自分の取り組みを見直す</li> <li>○思いや工夫をふり返る</li> <li>○新たな見方や感じ方を獲得する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○友だちの取り組み、作品の良さを認め合う</li> <li>○気付いたことを感想としてまとめる</li> <li>○学びや感じ方を獲得する</li> <li>○見方や感じ方を広げる</li> </ul>
言語活動例	表現材料体験 参考作品の鑑賞	作品の相互鑑賞 アイディアスケッチ	中間交流 (見る間くタイム) 共同製作 ふり返りカード	作品の相互鑑賞 ほめほめカード

図4 「思い」を大切にした学習過程と言語活動

本研究では、上記の学習過程の「発想」「構想」「表す」段階に、次頁資料4のような言語活動を取り入れます。これらの言語活動を通して、児童が「思い」を表現につなげ、自分なりの表現を追究できたかについて、実践事例Ⅰ、実践事例Ⅱを通して検証していくことにします。

「思い」を膨らませる	○表現材料体験や作品の相互鑑賞により、造形的な特徴に気付かせ、イメージや思いをもたせる。
「思い」を明確にする	○アイディアスケッチを基に、表したい「思い」、模様紙の生かし方、表現方法などについて意見交換する。意見交換の後は、アイディアを見直したり、新しい表現を付け加えたりする。
「思い」を実現する	○共同製作を通して、イメージをさらに具現化させ、自分の「思い」に近づく、効果的な表し方を見付ける。 ○製作途中の中間交流〔見る聞くタイム〕で、互いの作品を見合い、表現の工夫の良さや困っていることなどを自由に話し合う。意見交換によって悩みを解決したこと、新たに思い付いたこと、自信をもったことなどを基に更に製作する。

#### 資料4 本研究で取り入れる言語活動

実践事例Ⅰにおいては、【検証1】体験活動を通して形や色の特徴に気づき、「思い」を明確にすることができたか、【検証2】模様や色の気づきを基にイメージを広げ、表したい「思い」につなげることができたかについての検証を行います。また、実践事例Ⅱにおいては、【検証3】交流活動を通してイメージが広がり、自分なりの表現を追求することができたかについての検証を行います。

#### 《引用文献》

- (1)(2)(4) 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要等の改善及び必要な方策等について（答申）』 平成28年12月21日 別添9-2 p.168 p.171
- (3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』 平成20年8月 p.19
- (5) 柴田 信孝・井上 香織 「豊かな感性をはぐくみ、思考力、判断力、表現力等を高める 図画工作科授業の工夫・改善 ～言語活動の充実を通して～」『熊本県教育センター研究紀要第39集』 2010年

#### 《参考文献》

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』 平成20年8月
- ・佐々木 達行 『造形教育における授業の課題・目標と評価』 開隆堂 平成24年